

宇田川和夫・百瀬悦也, 1960: 長野付近の季節風雪について, 甲信地区研究会。
 宇田川和夫, 1964: 北陸不連続線と松本の南風および高山高気圧について, 研究時報, 16, 498-504。
 宇田川和夫, 1966: 松本の南風の発生機構について, 研究時報, 18, 338-352。
 内山文夫, 1969: 長野県の大雪と地上風の特性, 東京管区地方気象研究会誌。

内山文夫, 1970: 500 mb による季節風降雪の判定, 東京管区地方気象研究会誌。
 内山文夫・小池茂徳, 1973: 季節風による長野県の降雪の深さの地域とうづ度の位置, 東京管区地方気象研究会誌。
 内山文夫, 1974: 気流系の乱れによる飯山地方の大雪, 東京管区地方気象研究会誌。
 吉野正敏, 1961: 小気候, 地人書館, 172-174。



岡林一夫著

天気図の見かた

保育社, カラー自然ガイド 27, 1975, 文庫版, 150頁, 380円

山や海での遭難のニュースを聞くたびに、遭難者が多少でも気象の知識をもっていれば、あるいは難をのがれたのではないかと思うことが少なくない。天気図のみかたを心得ていれば、当然予想されたと思われる天気の変化にまきこまれている例が多いからである。

とはいっても、一般の方がたが、気軽に読める気象の本は非常に少ない。大部分は専門的な本であるし、ページを開けたトタンに、数式が列んでいたのでは、皆しりごみしてしまう。

こんど岡林さんが「天気図の見かた」という本を保育社のカラーブックの一冊として出版された。一般の人が手軽に気象に親しめるという意味で、上のような穴をうめてくれる本である。

天気予報は、理くつだけわかっていても、旨く当るといものではない。何年かの経験が積み重ねられなければ、予報は出せるものではない。その点著者は、第一線の子報官として、苦みも喜びもいくどとなく味わってきている。その経験が、文章の中に、酒のコクのような味わいをかもしている。その点、読みものとしても面白い。気象のほとんどすべての項目が、この小冊子に盛り込まれているが、その反面個々の問題としては、ややあき足りない点がないでもない。しかしこの小冊子に、予報も観測も、応用気象ももり込むとなれば、やむをえないことであろう。

この小冊子が、一般の人びとに愛されて、広く気象の知識の普及に役立つことを願っている。また気象に興味をもたれる方の、手軽な入門書としても、お勧めしたい。
 (大阪管区気象台 安藤隆夫)

——会員の広場——

雑 感

10月ごろから12月にかけて、月の半分ぐらいは霧が出るという福知山などは別としても、舞鶴地方でも複雑な地形環境からか、同じころ霧がよく発生する。交通のはげしい昨今やはり障害となる。この種の霧は大体放射性的なものだから、太陽が上るにつれて気温があがり、次第に消えてしまう。

霧に関連して、こちらで経験したことではないが、こんな現象をどう解釈したらよいのだろうか？

雨はあがってはいるが、霧（霧雨性のもの）がかかってぼうっと見通しの悪い状態がつづいている時、何かの原因で急に霧が晴れてくる場合を見たことがある。気象

的にまた時間的にみて風も弱く、気塊がいれかわったともまた気温変化などあったとはとても考えられそうもないのに、現在大気の温度測定にアスマン通風乾湿計程度の精度のものしか用いていない。したがって、そのとき微少な気温変化がたとえ起きていたとしても、それを検出できないのかもしれない。それにしても物理的にみて微少な気温変化が霧の消散に充分寄与するのだろうか？ それについては何もわからない。もっと別な原因によるものだろうか？ これらの現象をとおして、霧の発生や消滅を考えると、もっと別な測定方法なり、あるいは考え方をしなければ、今より前に進むことができないのではないかと——そういう気がしてならない。

(舞鶴海洋気象台 金谷光三)